
月島 桜の第二の人生

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月島 桜の第二の人生

【Nコード】

N9173R

【作者名】

ネコ削ぎ

【あらすじ】

ある女性の二回目の人生

未知との対談（前書き）

素人の戯れ言ですあまり気にしないでください。

未知との対談

憧れ。

昔、強いて言うなら子供のころにテレビでやってた特撮ヒーローを見た。画面いっぱい動くヒーロー。敵の罠にかかるも閃きや勇気で乗り越えるヒーロー。その全てに私は心を奪われた。

ある日、父親に聞いた。

どうすればあのテレビのヒーローのように成れるの？と。

父親は私の言葉を聞くとゆっくりと顔を此方に向けた。

父親の顔は厳しい印象を周りに与えると誰かが言っていた。見慣れている私からしてみればどうということはないが。

口を開いて言った父親の言葉は「あれはテレビだから実際にはない。だからオマエは成れない。諦める」だった。現実だ。

年を重ねていくにつれ、私はヒーローはテレビの中だけだと知った。同時にあることも知った。子供のころテレビに見たヒーロー。そのヒーローを演じる人たちが存在することを。彼らはスーツアクターと言われている。

私はすぐにそれを目指そうと決めた。

何十年かが過ぎ、私は自衛隊からスーツアクターになり、今現在、実家の近くにある道場で子供達に色々教えている。

子供達が家に帰り、道場の片付けを終え、家に帰った。…帰ろうとした。

暗い夜道にオレはいつもの様に車を走らせていた。

…いたはずだった。
急にハンドルが効かなくなり、スピードがあがっていく。
オレは止めようとした。ああ止めようとしたんだ。…もう遅かった
んだ。
人を…ひいてしまったんだ。

月島 桜（つきじま さくら） 48才……死亡

神がいたらどんな姿だろうか。昔オーディションに合格するために
知らない神に心の中で頼みこんだのが懐かしい。……現実を見よう。
目の前には自らを神を称する光の玉が浮いていた。

とりあえずどうしようか？未知との遭遇というやつか。

スーツアクター時代に多くの怪人もしくは怪獣を見てきたし、演じ
てきた。神を模したスーツもあった。

こう…神と言うと光り輝く裸っぽい人だと思つた…思っていた。私
の想像から裸っぽい人を取り除いたのが神らしい。
人生と言う奴は儘ならないようです。

神との対談は滞りなく？進んだ。以下に内容を記す。事故 謝罪？
転生？

私達の世界は平行世界のひとつで滅びに向かっていたらしい（詳しい
説明があつたが正直なに喋ってるか分からなかつた。）
神にとってテストケースのひとつでしかないからどうでもよかつた
らしいが。そのいくつかの実験場の中から稀に出てくる優秀な因子
を取り出す。新しい世界に因子を複製し、また取り出すとその繰り返し
返しである。私達の世界でいうところの事故に見せかけて回収する
ようだ。

しかし、私は異分子らしい。私だけでなく何人かいるらしいが。
だから強制的に転生させるとのこと。

意味わかんないでしょう。大丈夫、私もわかんない。

ある意味、真の転生者（前書き）

会話が3回しかない

ある意味、真の転生者

例えば：例えばですが、よくある話で平凡な主人公が前世の記憶を取り戻したとする。

すると、主人公は物語の中心人物となり、何か大きなモノに立ち向かったりする。

じゃあ、私みたいな存在はどういう人生を歩むだろうか。

私が月島 桜と言う前世をおくった月島 桜だと気づいたのは、物心がついて暫くしてからだ。

いきなり流れてくる見たことも聞いたこともない情報に脳の容量がパンクすることもなく、時間をかけて少しずつ知っていった。

名前に関して言えば月島^{ツキシマ} 桜^{サクラ}から月島^{ツキシマ} 桜^{サクラ}となった。…バツタもんくさくなった。

朝日が部屋に射し込んでくる今日この頃。いつもの様にベッドからでて伸びをする。

パジャマから着替えしたに降りていく。

「おはよう、相変わらず早いわね」

居間に着くと母親の声が聞こえてきた。

声のした方を振り向くと柔らかな笑みを浮かべた母がご飯をよそっていた。

父と母と一緒に朝ご飯を食べ学校へ行く準備をする。

家を出ると目の前に私より背の高い男の子が立っていた。

「遅いぞ」

彼がぶつきらぼうに言った。

彼の名前は鬼道きどう 暁あかつき。

顔の造形は日本人よりは外国人のそれであり、白髪で右側が青、左側が赤のいわゆるオッドアイと言う見た目をしている。

周りからはかつこいいだ素敵だ頭が良いだと色々噂されているし、実際に聴く。

しかし、私にはどうしても彼に対して好意が持てない。人気者だから嫉妬している訳ではなく、頭が良いから妬んでいる訳でもない。こつ…何ていうか、気持ちが悪い位完璧なんだ。

テストは百点、運動神経も良く、優しい。

まるで最初から何でも知っている様に完璧。

見た目に関しても、まるで創られたかの様に完璧だ。

でも多分、彼はあの光の玉みたいな神様の求める因子なのだろう。

俺の名前は鬼道 暁。

ぞくに言う転生者だ。

最近、乗用車で人をひいてしまうとと言う事故が多発している。

運転手は皆、ハンドル操作がきかなかつたと証言しているが、俺には解る。

ズバリ、転生トラックであると。

神様が故意にひき殺して、マンガやアニメの世界に転生させてもらえると言うアレである。

…がしかし、本当にそうだろうか。

この事件はトラックやらバイクなどと何でもありな御様子。この前何て、40のオバサンがひかれたんだ。

転生させるなら俺みたいなのアニメやマンガの知識があつて若い者だろう。

あーっと、転生してえなあ。

思いは現実と成る。

つまり転生出来た。

なんかよく解らない奇妙な場所で目覚めれば目の前には幼女や美人の神様ではなく、光の玉があつた。

光の玉が言うには、俺は選ばれたらしい。

マジかー！

俺と言う存在が世界にどんな影響を与えるかを知りたいらしい。

コイツ、バカだ。

ハッピーエンドでハーレムに決まってるだろう。

俺は色々要求した。

可愛い幼馴染みに天才的な頭脳、優れた容姿に運動神経。

あと、強力な力だ。

転生はスムーズだった。

両親は俺が地図を引っ張り出して眺めているのを天才だと大喜び。勿論、俺も大喜び。なんと海鳴市がある。しかも現在地。

幾年の歳月が流れ、俺はあの高町なのはが通う小学校に入学した。だが問題があった。なのはたちより2年も先輩だったのだ。

「遅いぞ」

唯一の救いが幼馴染みが可愛いことである。肩にかかる位の栗色の髪、真っ黒な瞳、柔らかい笑顔、全体的に無害オーラが出ている。

「ごめんなさい。待たせたかな」
少し申し訳なさそうに微笑んでいる。

可愛いは正義だ。

夜空より過去を見る（前書き）

少しは進みます。

夜空より過去を見る

私はあまり頭が良くない。転生したと言ってもそのスペックは変わらない。

昔から一回で物事を覚えることができなかった。

この小学校は学力でクラスを決めているらしい。同じレベル同士にして競って、高めあうようにとの配慮だろう。

勿論、私もこの学校の生徒だから闘争本能を刺激する学校側のやり方に巻き込まれている。

学力が高い方から若い番号の組になるらしい。三つの組があり、私は三組に属している。

つまり、私はバカだ。

まあ、バカと言っても元々この学校のレベルが高いからそこまで頭が悪い訳ではない。

…そう…思いたい。

私の幼馴染みこと鬼道 暁は1年から今までずっと1組だ。

勉強を教えてやろうかと声をかけられるが、あまり時間を取らせる訳にはいかないので、つつしんでお断りさせてもらっている。

昼どき…私はいつも一緒に昼食を食べる友達の誘いを断り、弁当箱片手に屋上へと続く階段を登る。

屋上の扉を開けると、勢いのある風が吹き込んできた。

制服のスカート裾を押さえ、約束の場所へと歩みを進める。そこには4人の男女（幼い）がいた。

1人は私の幼馴染みでアカツキ。残り3人は可愛らしい3人だ。

勝ち気で我が強そうな…訂正、強い アリサ バニングス。

おっとりとして良家のお嬢様している月村すずか。

運動神経は壊滅的だが、理数系が出来る高町なのは。

4人は私を認識すると各々反応した。

「何で、あんたがきてんのよ」

「いやいや…呼ばれたからですけど。」

アリサに対して心の中でつつこむ。

「まあまあアリサちゃん。サクラさんも何か用事があったんだよ。」
「すずかが私のフォロワーをしてくれる。……アカツキに好感を持って貰おうと私とアリサをダシに使わなければ満点ですよ。」

「どうして、サクラちゃんが此処にいるの？」

呼ばれたからなんですよ、なのはちゃん。

「おう、来たか。まあ、座れよ。」

アカツキが自分の隣を叩きながら言った。

私は溜め息をつくしかなかった。

このお三方は「アカツキ」が一番近い私が嫌いらしい。まあ…嫌いと言ってもあからさまな嫌いではなく「アカツキ」が何かと私を呼ぶのが気に入らないのだ。アカツキ（敵）がいなければ、そこそこ仲の良い関係になれただろう。…あんた達とは戦場以外で会いたかった。…が、しかし、私はこのアカツキ争奪戦（私命名）には参加表明はしていない。

なのに私は最強の敵として全員に認知されている。

私が貴女達の前に立ち塞がったことはない。

「他の友達に断っていたから、遅くなりました。先に食べていても良かったんですよ」
地ですよ。

「おいおい…サクラだけ居ない状態で食べる訳ないだろう」

左様で御座いますか。普通に有難うございます。

「気にしなくても良いんですよ。」

気遣いは一流？ですね。何か下心みたいなオーラを隠しきれないようですけど。

夜、私は二階の自分の部屋で窓から空を見ていた。

夜空が私の心を癒してくれる。

前世で自衛隊として新人だったころはよく空を見ながら涙したものでした。

あの頃は様々な事に心身共に疲弊していて自衛隊を連想させるものを見たくなかった。

今思うと、私を圧倒する何かを感じたかったからかもしれない。

「私はどうすれば良いのでしょうか」
「呟きは空に消えていく。」

答えを誰かに求めたわけではないが、口から言葉を発しなければ、いつか発狂してしまいそうだ。

…そろそろ閉めましょか。風邪ひいたらいけませんし。

窓を閉めようと手を伸ばした時、私の意識は彼方へといった。

よつこそ非日常へ(前書き)

要らない部分が多々あります。

よつこそ非日常へ

私は正義のヒーローだった。

「どうして…どうして私の邪魔をするんだ、お前は。」

突きだした切っ先が相手の剣に逸らされる。

「貴女のやってることは間違っているんだ。いい加減に気がつけ。」

私とは違う正義のヒーローが叫び、右手持つ剣をやや下に横に薙ぐ。叫ぶついでに力んでいたのだろうか？横薙ぎが私の脇腹に勢いよく入る。

私は仮面の下で顔を苦痛に歪める。

何か嫌な感覚がする。

日常生活に支障をきたすような…多分やってしまった。

目の前のヒーローから狼狽える気配がした。

私はすぐさま拳を突き出す。

相手は私の行動に気づいたのか、構える。

「うおおーっ！！！」

ヒーローの必殺の蹴りが私に刺さる。

「私は万人の正義でありたかった。」

力を振り絞った最後の独白。

「カット!!」

撮影場に監督の声が響く。

…誰か…救急車…

気づいたら病院のベッドの上だった。

病院だと知ったのは、母親が泣きながら抱き締めて数分してからだ。何か凄い音がしたらしく両親が急いで私の部屋へと踏み込んだのだ。すると、目の前に荒れ果てた部屋の家具とその家具を背に左目と左腕から血を流した私がいた。

両親は何があつたか判らず混乱したが、いち早く立ち直った母親が救急車を呼んだらしい。こういう時に女性の方が強い。

その間、父親が傷をタオルで押さえながら、私の名前を呼び続けた。病院で寝ている間に、警察による現場検証があつたのだが、原因が解らないらしい。

私が倒れていた位置から、窓から何かが投擲されたんじゃないか、と言う仮説が浮かんだ。

結論を言えばほぼ有り得ない。私が窓際から壁の所の家具まで吹き飛ばすと、かなりの大きさの物体でなければならぬ。

がしかし、窓と私の傷の大きさからどんなに大きくても手のひらに収まる位の石か何かしかない。

さらに、私の傷から普通の人間では到底不可能なのだ。警察も匙を投げるしかない状況になってしまった。

警察の報告だけでなく医師からの残酷な報告があった。

左目の失明と左手の神経が切れて脳からの指令が届かなくなったのだ。

つまり、左手が動かないのである。

「ただ、不思議なのは、神経にダメージを与えたと思われる物体が検出されなかったことです。

私も様々な患者を治療してきましたが、今回のようなケースは初めてです」

私を傷付けた犯人は見事に行方を眩ませた。

私がかつこのことで学校へ行くと、アカツキとなのはちゃんが数日間学校を休んでいるとクラスの友達とアリサ&すずかから聞いた。

……犯人!?

そんなわけではないだろう。

だけど変だ。

なのはちゃんはともかくアカツキは1年から5年まで一度も休んだことがないミスター皆勤賞なのだ。

片方だけが休むなら分かる。

インフルエンザや花粉症が流行っているわけではない。両方が休むのは何か作為を感じる。

まあ、アカツキがないので私の周りは平和になるから構いませんが。

平和の有り難みを感じるのは非日常に巻き込まれたときだろうか。

「そのジュエルシードを渡して下さい」

やだあゝ、なにこれ。

「サクラ、それをこっちに渡してくれ」

「サクラちゃん、ジュエルシードを渡してなの」

ジュエルシード？

宝石？種？宝石の種？

か、金のなる木？一攫千金ですか。

何かよく解らないけど大変な事態だ。

逃げると言う選択肢があるけれど、左目を失明してるから距離感が掴めず、左手を動かせないからバランス感覚も少し自信がない。

「えっと、これはどうすれば良いんですか」

私は周りを見渡しながら、控え目に言うしかなかった。

今、周りには漫画に出てくるような服を着て、西洋の剣を機械っぽくしたモノを持ったアカツキに同じく漫画に出るような、わたし、魔法少女と言っている格好で機械の杖を持ったなのはちゃん。

少し首を動かせば、金髪のツインテールに黒いスクミズ？を着た私の常識や羞恥心では考えられない格好をした少女がいる。

どうすれば…こんな魔境にたどり着けるだろうか。いや、たどり着けるわけではない。

いつもの帰り道を歩いていて、目の前で一瞬何か光った気がした。気になって光った場所まで行くと綺麗な石が落ちていて拾ったら件のジュエルシールドだった。

…私のせいか。

自分の軽率さを悔やむしかなかった。

私の心誰も知らず（前書き）

飛びます。色々な過程を

私の心誰も知らず

ジュエルシード。

異世界においてロストロギアと呼ばれる高エネルギー体で使い手の願い事を叶えてくれるモノだ。

夢のような話だ。

問題もある。

それは、歪んだカタチで願い事を叶えてしまうのだ。

そんな危険なモノが21個も存在する。

私の拾ったジュエルシードは私に強い願いが無かったから暴走することはなかった。

「次元航行船アースラの艦長、リンディ・ハラウンです。貴女はジュエルシードを拾ってしまいましたが、今回は暴走しなかったから大事にはならなかったようですが」

ですが…と言われても。

なぜか和室で対面しながらリンディ・ハラウンと名乗る緑色の髪をした女性が言った。

「はあ？」

理解が出来なかった。

目の前の女性が何を言っているのか、私の置かれている立場が。

すると私の隣に腰をおろしていたアカツキが動き出す。

「リンディさん、今回のことは不可抗力だ。サクラを責めるのは間

「違えている。」

有り難うアカツキ。私、責められていたの？

アカツキを挟んで向かい側に座っているのはちゃんから気のせい
か不穏な気配がする。

私アカツキに庇われたからか？

この状況なのに凄いなね君。

兎に角、私は不問とされた。

代わりに魔力の検査をされた。

アカツキがやたらと勧めてきた。

結果は私の中に魔力があることが解った。

魔力の量はBランク相当あるらしい。

周りの管理局員は少し肩透かしを食らったような顔をしていた。

どうやらアカツキとなのはちゃんの魔力総量が桁違いに多かったか
らしい。

比較しないで欲しい。いい迷惑だから。

リンディさんから、今日は家に帰ってもいいと言われたので、有り
難くそうさせてもらった。

出来れば、「今日は」の所を「もう」にしていただければ尚嬉しい
です。

アカツキに家まで送ってもらい、両親とご飯を食べ、お風呂に入り、

ベットに横になるとほっとした。

気付かない内に現れた異世界からの訪問者。

周りに関わっている人達がいる。

たった1つの石：ジュエルシードと言う石を拾わなければ、私のこの暖かい日常は崩れることはなかっただろう。

今まで通り第二の人生を歩んでいた。

あの光の玉の神様について考えながら。

でも、関わってしまった。私が純粹で無垢な普通の子供なら…転生と言う異常体験をしていないなら、私は魔法への期待と憧れを持って嬉々として関わっていたかもしれない。

今日起こったことが残酷な現実でなく、夢であってほしい。

私は静かに目を閉じた。

朝、いつものように手順を済ませ、学校へ行く。

授業を受け、クラスの友達と昼食をとる。

放課後…ここまでは順調だ。

私好みの日常だ。

もうすぐ…もうすぐ家に着く。

「サクラー!!」

アカツキ（敵）の呼ぶ声が聞こえる。

…終わった。

次元航行船アースラに再び連れて来られた私の心は崩壊寸前だ。

隣にいるアカツキに目を向けると私に笑顔を向けてくれた。

「大丈夫だ。昨日みたいにはならないし、させない。」

有り難うアカツキ…でもね…もうなっているんだ。

主に君のせいだ。

モニターに映るのはピンクと金色の魔法のぶつかり合いだった。

私より年下の女の子が平気で魔法を撃ち合っている。

常識を疑う。この光景にも管理局員がそれを許していることにも。

子供の喧嘩と口で言うことが出来るし、そう思うことも出来る。

でも、これは子供の喧嘩には無いものがある。

1つは魔法だ。

リンディさんが言うには非殺傷設定があり、傷つけることはないそう
うだ。

魔法で傷つくことはないかもしれない。

しかし、魔法によって起こる事態…例えば建物が崩れるだとかのこ
とに巻き込まれたら最悪死んでしまうかもしれない。

2つ目はジュエルシードを賭けていることだ。

封印処理をしているとはいえ、そんな危険なモノを気軽に賭けてはいけない。

気軽じゃなくてもいけないが。

この危険な事態に大人の、管理局員は反対したのだろうか？

例え反対しても、なのはちゃんがやりたいと言うことで得た免罪符を使ったら意味がない。

大人が：子供を諭し、叱るべき立場の大人が、ましてやその道のプロが出会って数週間の才能はあってもバリバリ素人の子供にこんなことさせるのを許すのか。

私も昔はスーツアクターとしては素人だった。

しかしちゃんと指導してくれる殺陣師の方がいてくれたからあの時の私があったのだ。

ろくに訓練を積んでいないアクターが剣劇やら行ったら怪我を負うことになるし相手に怪我を負わせることになる。

何の為の管理局だよ！！

叫びたい気持ちだ。

そうこうしている内に勝敗は決した。

なのはちゃんが金髪の女の子をバインドと言う拘束魔法で捕らえ、収束した魔力の砲撃、スターライトブレイカーなるもので殺し…訂正、止めを…訂正、倒した。

何この魔法少女？

スッゴい残酷なんです。

その後、何もない中空から雷みたいなものが降ってきて、魔法少女？達を襲った。

立ち会いをしていたアカツキが2人を守っている隙にジュエルシードが奪われていった。

「座標特定…出来ました」

通信士のエイミー・リミエッタが報告した。

「我々はこれから、プレシア・テストロッサの拠点にのりこみます」

リンデイさんは高らかに宣言する。

流石は艦長さん、立派です。

……ですが、囑託でも現地協力者でもない私が乗ったままなのが。

起きるチカラ達（前書き）

話が分かり辛いと言う方は各々の頭で想像してください。スイマセ
ン。

起きるチカラ達

時の庭園。

件の犯人、プレシア・テストロッサの居城。

そこに数多くの武装隊が乗り込んでいった。
がしかし、圧倒的な質の前で量は無力に等しかった。

「人形」「取り戻す」

プレシア・テストロッサの言葉の内、私の鼓膜に残ったもの。

崩れ落ちるフェイト・テストロッサ。

アカツキによって抱えあげられる。

その瞳には正気はない。当たり前だ。今までの人生が：記憶が植え付けられたものだと言われたのだから。唯一の拠り所の母親に拒絶されたのだから。

私も光の玉の神様によって造られた人形だ。いや、私だけでなく、世界の全員が神様の人形と言うべきだろう。

皆はそんなことは知らないだろう。だが私は転生することで知ってしまった。この世界は神様の実験場の1つでしかないのだ。

目の前でフェイトを介抱するなのはアカツキのどちらかが神様に選ばれ、その因子を次の実験場に持っていかれるかもしれない。フェイトかもしれないし、リンディさんかもしれないし、もしかしたらモニターの向こうにいるプレシア・テストロッサかもしれない。

たまに思うのだが。

今此処に存在する私は本当に月島 桜と言う私なのだろうか。何を言っているか解らないだろうが発作的に思ってしまう。

いつも何処か頭の中で思うが、そのときだけ怖くなる。

月島 桜に成ろうとする誰かじゃないのか。

頭が割れる様に痛み、酷いときには精神が崩壊してしまいそうになる。

アースラの医務室。

フェイト・テストロツサは力なく横たわっている。

生気を感じられない身体。医務室の雰囲気と共鳴しつより一層空間を異質に変えていく。

私は病院や医務室が嫌いだ。これらの空間は曖昧な場所と定義している。

医務室は兎も角、病院は生と死が多い。

日常が白で死ぬことが黒なら、病院は灰色だ。

あの空間ははつきり言って怖い。前世で自衛隊やスーツアクターをしていた時に様々な怪我を負うことがあった。

スーツアクターの時に同僚が死ぬことが一度だけあった。

今ではスーツアクターもしくは殺陣師には安全のための協会が存在するが。

リハーサル中に新人の殺陣師が振るった模擬刀が熟練の殺陣師の頭に当たり、還らぬ人になった。

病院で必死に生きようとしたが、あの世に引きずられる様に死んで

いった。

それ以来、私にとって病院や関係のある機関が嫌いになった。

「サクラ…一緒にアカツキ達を助けにいこう。」

いつの間にか生気を取り戻したフェイトが私に言う。

分かりません。彼女が何を言っているのか。

私：戦えませんか。

「わたし、母さんと話がしたい。ちゃんと向かい合いたい。協力してほしいんだ」

向かい合うのは立派ですが、立会人の選択を間違えていますよフェイトさん。

気がつくとも目の前にはフェイトの母親ことプレシア・テストロッサと私に背を向けて対峙するフェイトがいた。何時でもフェイトちゃんを守る様にデバイスを構えたクロノさんがいる。

左目と左腕が疼く。

何か起こるのを示唆するように。

プレシア・テストロッサが何かを叫ぶ。

彼女から放たれる狂気。

娘を思い、取り戻そうとする彼女の狂気はこの場を支配し、犯そう

とする。

魔力があるとはいえ、転生したとはいえ、一般人の私には恐ろしいほどの重圧と成って襲いかかる。

そのせいだろうか、一瞬：何が起こったか解らない。
痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいたいいたい
痛い痛いイタイイタイイタイイタイ熱い熱い熱い熱い熱い熱いあつい痛
いああああああアああーっついいいい！？助けて助
けて！！誰か痛みをこの激痛を熱い痛いなななななんとか！！止め
て止めて止めて止めてええ！？

俺となのはとフェレット…もといユーノ・スクライアは時の庭園の
動力炉を止めて、フェイト達と合流するために急いで走った。

勿論、なのはをお姫様抱っこして。

なのはは顔を赤くしつつもどこか幸せそうだった。

プレシア・テスタロッサがいる場所に俺達が着くのとプレシアが電
撃の魔法を放つのが一緒だった。

こんなオバサマと息ピッタリと言つのもやだな。

「「サクラー！！」」

クロノとフェイトの2人が叫ぶのを聞いた。

声の発信源を見ると左半身が焼け爛れたサクラが倒れていた。見るも無残な姿だが、俺は狼狽えることはしない。

何故なら俺は彼女が死ぬことはないと知っているからだ。

…が怒りは感じている。

俺の可愛いハーレムメンバーの中の1人にこんな傷を負わせたんだ。

「サクラ!!!」

俺はサクラの無事な右手を掴みながら呼びかけた。

そしてプレシアを睨み付けた。

プレシアは関係ないと言わんばかりに周囲に浮かべた8個のジュエルシードに魔力を注ぎ込んで暴走させた。

「私はアリシアを取り戻す。アルハザードで。失われた技術をてにいれて。」

ウフフ、誰も…誰も邪魔はさせない!!。何人たりとも。アリシア

…アリシアアあああーっ、もうすぐ、もうすぐだから!!」

狂ってるな確実に。

まあ、狂ったオマエは次元の狭間に飛び降り、悲しんだフェイトを慰め、サクラの傷を完治させる。それで万事解決。2人は俺のハーレムの仲間入り。

とりあえず、あのバアサンをしめる。

アカツキ、出るぜ!!!

俺が突撃しようとした時、プレシアの周りのジュエルシードが輝い

た。

あのアリシアに似てもにつかぬ人形に放った殺傷設定の攻撃は外れた。

まあ、構わない。後ろにいたサクラと呼ばれる子供に当たり、人形と執務官が私を警戒しながら彼女に駆け寄った。

もはや、私とアリシアの邪魔をする者はいない。

誰もが夢に見たアルハザードに行くのよ。

周囲のジュエルシードを暴走させたる。

次元震が起こり、空間が割れた。

開いた！！

あとはアリシアと向かうだけ。

突然、次元震が止まった。

いったい…何が？

執務官も人形も戸惑っている。

奴らの仕業ではないのか。ジュエルシードが止まっている。私の魔力で暴走したはずなのに。

いったい…いったいなな何が起こっているの。
解らない。誰の…仕業？

ジュエルシードから魔力のパスを感じる。

私でも執務官でも人形でも白い魔導士でも、この中で一番の魔力を持つ少年でもない。

まさか！！

先ほど倒れた少女をみる。

焼け爛れた皮膚が再生していく。傷付いた左目が治っていく。

彼女から先ほど感じた魔力からは有り得ない量の魔力を感じる。まるでジュエルシードの魔力：まさか：そんな、どうして彼女の左腕からジュエルシードの魔力を感じる？左目からジュエルシードの魔力を感じる？何で彼女自身からジュエルシードの魔力を感じる？

ジュエルシードと融合しているというの！？

周囲のジュエルシードが彼女に犯されていく。

どんな量の魔力をぶつけても私の制御下に渡らない。

私の願いは……。

私は自ら吐き出した血の海に没した。

影響の断片（前書き）

話：飛びます？

影響の断片

プレシア・テストロッサ 死亡。

死因はジュエルシードから放たれた魔力が彼女の身体を蝕む病魔を促進させた事だと思われる。

ジュエルシードがこのような現象を起こしたのは、民間協力者によるものだと推測される。

月島 桜

我々の言い方で言うならば、サクラ・ツキシマ。性別は女。

年齢は11才。

プレシア・テストロッサが引き起こした事件、以降PT事件とする。PT事件に対応中のアースラと民間協力者のアカツキ・キドウとナノハ・タカマチがプレシア・テストロッサの娘のクローン、フェイト・テストロッサとの戦闘時、ナノハ・タカマチの放った砲撃魔法によって吹き飛んだジュエルシードを拾う。

この時既に、サクラ・ツキシマの左目と左腕にジュエルシードが寄生していた模様。何故、ジュエルシードが彼女に寄生したかは不明である。

魔力総量はBランク相当とそこそこではあるが、彼女の戦闘力は未知数。…だが素人でしかないと思われる。アカツキ・キドウとナノハ・タカマチとは、友人関係にあり、魔法を知覚してからは上記の2人を心配してか、アースラで民間協力者となる。

プレシア・テストロッサの居住「時の庭園」において、フェイト・テストロッサと共に乗り込むも、プレシア・テストロッサの攻撃に

よって左半身に重傷を負う。

その後、彼女の中にあつたジュエルシードが他のジュエルシードと共鳴し、彼女の傷を修復する。そして、ジュエルシードがプレシア・テストロツサの病魔を促進させたものと思われる。前者は彼女が負つた痛みを止めたいと必死の願望がもたらした結果で、後者は痛みの原因となつたプレシア・テストロツサを殺害する事によつて止めたと思われる。

「これが、私達が内通している管理局員からもたらされた個人の報告書だよ。

もう少し真面目に書いて欲しかったんだけど…まあ、興味が持てたから構わないけれどね。

プロジェクトFも興味が有つたんだけど、君のジュエルシードに正しく願いを伝えることが出来る能力の方が興味あるしね。

ああ、大丈夫だよ。私は変態ではないからね。君を虐めぬきたいとかは考えていないよ。純粹にモルモットとしてしか見ないから安心するとよいよ。」

様々な機材が詰まつた部屋で白衣を着た男が嫌味のない優しい笑顔を浮かべていた。

「さあ、楽しい実験を始めましょうか、サクラ・ツキシマさん」

「僕は今まで、地上の平和を護る為なら何でもやってきた。」

広い事務室のような所で1人の男が話し始める。

1人の女性が沈黙を保つ。顔には男を気遣う気持ちが浮かんでいる。

「だが、こんな…こんな小さな子供が実験台にされているとは…！」

男は自らの行いの結果を知り怒った。

手元には先程壊滅させた違法研究所についての報告書が握られている。怒りのあまり、報告書を握り潰していた。

「オーリス、あの娘が目覚めたら…知らせてくれ。」

オーリスと呼ばれた女性は頷いた。

「解りました、父さん」

男、レジアス・ゲイズは実験施設から唯一保護できた淡い桜色の髪をした少女を思っていた。

ハジマリを(前書き)

戦闘描写?なんで?

ハジマリを

闇の書事件が幕を閉じた。俺の活躍で、はやてもヴォルケンリッターも俺のハーレムに仲間入りだ。

幼なじみのサクラは闇の書事件の前にフェイトと一緒にミッドチルダへと向かった。サクラがジュエルシードに正しく願いを伝えることが出来るのを知ったリンディさんがジュエルシードによって身体に害がないか調べるためにだ。

あと、ついでにジュエルシードが暴走しないようにとの保険として。闇の書事件開始時、サクラは帰って来なかった。

リンディさんが言うには、あっちの精密検査で身体に問題が見つかって緊急入院する事になったらしいとのこと。

サクラの両親には空気感染してしまう重い病気にかかり、治療中だと。

おばさんとおじさんはショックを受けたようで酷く取り乱していた。何処の病院だとか、どんな病気なのか、大丈夫なのかとか。

俺が思うに、これはフ・ラ・グー！

病魔によって心身ともに疲弊したサクラ（ヒロイン）を俺が抱きしめ優しく接する。すると、なんとサクラは俺にメロメロ！！

サクラは心が広いから、なのはやフェイト、はやて、ヴォルケンリッターの女性陣がいても微笑みながら「もう」と言って許してくれる。

……たまらない！！

あの少女を父さんが保護してから幾年か経った。

管理局の制服を着たオーリス・ゲイズはデスクの資料と向かいあいながら思考していた。

父さんが罪滅ぼしに面倒を見始めてからは少し変わったかもしれない。

高ランク魔導士やレアスキル持ちに対しての偏見が少しだけ軟らかくなった。

私に隠していた戦闘機人計画と言うものを行っていたことを告白してくれた。更にその計画から手をひいた。

あの娘は私のことを姉さんと呼んでくれる。最初は恥ずかしかったし、どう接すればいいか分からなかった。

だけど…今は、そう呼ばれると少し嬉しくなる。妹とは、こういうものなのだろうか？

珍しい客が来たな。

紺色の髪を肩にかかる位伸ばした20代前半の男、レイアーノ・レクリエは長机に仰向きに寝ながら思っていた。

かつてミッドチルダで栄えたビル群。ある事件を境に見放された辺境の街に立つビルの内、最も低いビルに彼の寝床が存在した。

彼がこんな所に居る理由は簡単だ。

秘密基地みたいだから。

そして彼は様々な質量兵器を配置して理想の秘密基地を造りあげた。勿論、地雷や殺傷力のある簡易的なトラップ以外は飾りである。地雷は何者かが侵入してきて、餌食となったので今は存在しない。

トラップを避けてくるとは…手練れか運がいいか。

侵入者がレイアーノの前にあるドアの所で止まったのを感じて、手元にペンを引き寄せた。

ドアが開き女性が入って来た。

レイアーノは女性に対して警戒心を上げた。

管理局の制服に身を包んだ淡い桜色の髪をした女性だからだ。

「お邪魔します」

女性は優しく微笑みながら口を開いた。

「レイアーノ・レクリエさんですね。デバイスマイスターの」
暫く…場に沈黙の時間ができた。

「間違っていたらまずいんですけど、沈黙は肯定としますよ」

少し困ったように微笑んでいた。

「何の用だ」

面倒なのでとつととお帰り願おう。

右手に握っているペンの形をしたデバイスに告げる

セット・アップ

ペンが薙刀型のデバイスに変化し、バリアジャケットを展開する。

オレが戦闘態勢に入るが構わず、微笑んでいた。

「貴方を管理局にスカウトしに来ました。ちなみに陸です」

女性はそう言った後に、何かに気付いたのか再び言葉を発した。

「名乗るのを忘れていました。私の名前は」

「あー、名前はいいわ。どうせ直ぐに帰ってもらうから」

デバイスを前につきだす。

「な!!」

放たれた電撃が女性に襲いかかる。

女性は瞬時に横に飛び、自らの相棒に告げる。

「ラピエサージュ…変身!!」(セット・アップ)

オレは初めて敗れた。リミッターを付けたままの相手に。

空白の事件（前書き）

とりあえず主人公不明

空白の事件

いつもの職務を終えて自宅アパートへの帰路についた。帰ったら何をしよう。明日も仕事だから時間がないしな。

路地裏に入り、急ぎ足でアパートに向かう。

もう少しで路地裏を抜けると思った時、自分以外の足音が聞こえた。

「ねえ、貴方管理局の人？」

「違います」

めんどくさいし、関わりたくない。そく、否定させてもらおう。と「
ろが…。」

「違うよ。ずっとつけてたんだから。」

「マジか！？とんだストーカーだな」

後ろ向きのままでの会話。場合が場合なら別れのシーンだな。声からして相手、女みたいだし。

「何の用だ。今から家帰って何かすんだけど」

「何かって何を？」

「何かは何かだよ」

「ああ、もしかして彼女？」

「そうだったら、どんだけ良いか」

顔も知らないコイツ。

とりあえず後ろを振り返った。

目の前に大鎌型デバイスを振り上げた少女がうつつた。

条件反射で後ろに飛び退いたのだろう。大鎌が目の前の地面に刺さった。

「ちよっ！？おま！！何してくれてんの」

胸のポケットから一枚の薄い鉄の板を取り出す。

「しゃあない。…セット・アップ！！」

身体を魔力が包みこみ、バリアジャケットを構成する。手には先端が二又に分かれている杖が握られている。

「とりあえず、逮捕な」

シューターを生成して放つ。

少女は大鎌を振り回して全てを叩き落とす。

負けじと男もシューターを連射する。

「あーもっ…うざいな！！」

少女はデバイスを振り回し、魔力刃を解き放つ。

男のシューターを全て切り裂き、迫りくる。

「プロテクション!!」

魔力の壁を作り出して魔力刃を防ぐ。

「んー、ならこれは…どうかな!!」

カートリッジ…ロード

機械音声とともにデバイスから薬莖が吐き出される。

不味い!!

オレ、カートリッジ使い切ってるのによ。

「はい、サヨウナラ」

少女が身体ごとデバイスを振り回し、魔力刃を次々に射出する。更に回転しながら向かって来る。

三発でプロテクションが破られ、身体が切り裂かれていく。

鋭い痛みが嵐の様に身体中を襲う。

嵐が過ぎ去った後、男の身体は崩れ落ちた。

その場は男の血とその血に濡れた栗色の髪の少女がいた。

「低ランク魔導士ばかりを狙う魔導士ねえ」

事件報告を聞いたレイアーノはどうしても良さそうに答えた。

「今は低ランク魔導士だけが被害にあっていますが、いつか隊長も狙われるんじゃないですか」

部下の1人冗談めかしく言った。

「そしたら、犯人しばく」

「止めてください。周りから五月蠅く言われますよ」

「だったら、そいつらもしばく」

「絶対に止めて下さい」

レイアーノは部下の小言を聞きたくないなので適当に切り上げて部署をでた。

通路を歩きながらレイアーノは考え事をしていた。

あの日、淡い桜色の髪をした女性……というよりは少女に負けてから管理局に就職させられてしまった。今となってはどうでもいいが。あの少女は見たことのない体術を使いオレを追い詰めていった。追い詰められた後少女は、一枚の書類を突きつけてきた。管理局に入るための書類だった。

オレが入るのは陸で新設された「特殊戦闘技術教練隊」と言う。周り曰く、エリートらしい。前科者のオレが隊長をとめているのだが。

ちなみに、特殊戦闘技術教練隊、通称「戦技隊」は総称だ。いくつかの部隊が存在する。オレはアサルト分隊長に就任した。戦技隊創設には様々な障害が存在した。

レジアス中将の「犯罪してました」というカミングアウト。周りからの非難。資金集め。

最初に関してはレジアス中将の元々がミッドの為と市民が知っていたから、そこまで酷くなかった。ただレジアス中将を退けて成り上がろうと躍起になった。

2つ目は我らが「ストライク分隊」隊長の活躍と空のエース宜しく陸のエースと成り、宣伝した。

目的の場所に着くと、そこで指導をしている淡い桜色の少女へと向かった。

「レジアス中将から任務が来たぞ」

桜の人(前書き)

少しずつパワーダウンする自分がある。

桜の人

この前も要らない管理局員を始末してあげました。

今までに何人も消してきたお陰で世間では、「斬殺卿」と呼ばれている。殺人現場に刃物の痕跡が大量に残されていたことにちなんでらしい。

んー、今から私は「斬殺卿」だ

ぶったぶったぶったぶった切る。

につくき局員ぶった切る。よーし、行くぞ

僕は高ランク魔導士が嫌いだ。誰からもチヤホヤされて調子に乗っているから。ムカつくってやつ。

そりゃあ、管理局が才能が有ったり強い奴を求めるのは分かる。だからといって弱いく才能のない僕等を切り捨てるなんて。

万年人手不足と豪語している癖に僕をスケープゴートに使うのは最悪だよ。理解出来ないよね。お陰で僕は周りから味方潰しのハグルトなんて言われますし。

エース・オブ・エースの高町なのは。アイツに関わらなければこんなことにならなかつたよ。

自分の身体を汚れない無能エース様が負傷したのを僕が責任を取らされた。同行していた局員の中で一番魔力総量が少ないから。

今ではこの魔力総量の少なさに感謝しているんだけどね。

天使に出会えたんだから。

次元航行船「スペリオル」がテロリストに占拠された。
そんな報告が入ってきてから管理局は混乱状態に陥っていた。
何故、次元航行船が奪われたのか。
何故、船員は何をしていたのだ。

管理局特殊戦闘技術教練隊及び陸のトップであるレジアス・ゲイズは責任追求ばかりで、進まない会議にうんざりしていた。

「奴らはミッドの住民を人質に我等管理局の高ランク魔導士を処刑する事と、莫大な身代金を要求してきた。」

「だが管理局がたかがテロリストどもに屈することは許されない。」

「人質はどうする」

「力もない奴らは我等が守っているのだが、高ランク魔導士を殺してまで守ることはない」

吐き気がする。

このくだらない組織陣のやり取りを聞いていると。

犯人達が定めたタイムリミットまで少ししかないというのに。

「我々は最善を尽くした。それでいいのでは？」

貴様等はそれで良いかも知れない。だが儂等陸の人間そういう訳にはいかん。

レジアス・ゲイズは無意味な会議に見切りをつけ、地上本部へと戻

ることにした。

会議室を出ると1人の局員が待機していた。彼はレジアスを見ると直ぐ様ピシッと敬礼をした。

「マレック、戦技隊に連絡しろ。使用許可を出す。空中で次元航行船スペリオルを破壊しろと。」

ある場所に、かなりの数の集団が集まっていた。普段そこは人々で溢れかえる活気のある場所だが、今はない。代わりに管理局員達の伝令や通信が飛び交っていた。誰もが顔に笑顔などなく、緊張に支配されていた。もうすぐこの場所に次元航行船スペリオルが落ちてくるのだ。

生きた心地がしない。

作戦開始を待つオーリス・ゲイズはそう思った。

「ストライク、アサルト、ブラスト分隊の各隊長到着」

現場に大きな声が響き渡ったのと同時に管理局の自動車が到着した。ドアが開き中から2人の男と1人の少女が出てきた。

「それじゃあ…始めますか」

淡い桜色の髪をした少女が言った。

空を見つめ、何を思うのか。私には解らない。父さんが保護して、管理局に入ってから、辛いことがあると空を見つめていたこの娘は、

今は何を想っているのだろう。

顔も知らないテロリストか。

ミッドの人々か。

まさか：父さんだろうか。

気づくとあの娘は白と所々に赤が入っているロングスカートのアジャケットを纏っていた。左手には杖状のデバイスが握られている。見る人によっては空のエース 高町なのはを思い浮かべるであろう。

だが彼女とは違い、あの娘の身体にはいくつかの赤い布が巻き付いてある。本人曰く、自らの過ちの数だけ巻き付けたそうだ。これはあの娘が任務で負った大きい傷の場所に巻き付けてある。

もうひとつだけ、高町なのはと違う部分がある。あの娘はバリアジャケットの上に茶色のローブを羽織っている。制服の時にも羽織っているが。

それは戦技隊長の証だ。あの娘の取り巻きの2人の隊長であるレイアーノ・レクリエとスードロ・ハグルトもバリアジャケットの上に羽織っている。

あの娘のデバイスからロストロギア「ジュエルシールド」が射出され、輝きを放つ。

デバイスを構え、魔力を収束させ始めると、シ射出された13個のジュエルシールドがあの子の周りに集まり、回転する。

次元航行船スペリオルが目視出来る位置に来たときには、1個人には出すこと出来ない程の魔力が渦巻いていた。

「これより、次元航行船スペリオルの破壊を開始します。他の局員は破壊した衝撃で落ちてくる残骸を破壊またはバインドで固定してください。」

ハッキリとしたどこか頼もしい声が響き渡る。
それに触発された様に、様々な所から力強い返事が聴こえる。

「カウントダウン、3…2…1」

誰もが固唾をのんで見守る。

ストライクっ… バスタアアアー！！

淡い桜色の収束魔法が天へと伸びる柱の様だ。

次元航行船スペリオルは圧倒的な力にのみこまれた。

陸のエース、月島 桜

ミッドチルダの危機を救う。

別れた日 別れの日(前書き)

脱線

別れた日 別れの日

どれくらいの年月が流れただろうか。短いようで長かった気がする。

あの日、桜が病気となり、私達夫婦に何の連絡もなく、場所も知らされなかった。見舞いに行くことも出来ず、あの娘に孤独の闘病生活を強いてしまった。桜の頑張りも虚しく、死んでしまった。その残酷な知らせを届けに来たのは、リンディ・ハラオウンの知り合いと言う男だった。事務的な会話を淡々されて、気付いたら玄関の扉を閉めていた。

妻も私も暫く理解が出来なかった。何が起こったのか分からなかった。大事な娘が死んだ？
妻が泣き崩れる。

私の見ていた景色が下がった。気づいたら地に膝をつけていた。

今まで通りに生活して、高校受験で四苦八苦するあの娘を見守り、二十歳になったら娘の晴れ着を見て成長を嬉しく思う、そんな事になるのを考えていた。もう二度と娘を見ることが出来ない。

遺骨のない墓。

病気先から遺体の返還がなく、火葬する事もなくなってしまった。妻と一緒に墓周りを掃除して線香を置く。線香の煙がゆらゆらと空へ消えていった。

暫く留まっていたが、そろそろ帰ろうかと、妻と帰路につく。

自宅の前まで来ると、人影が見えた。

桜の花びらを思わせる色の髪をした少女だ。高校生くらいだろうか。

私達が近づくと少女が振り返った。

何処かで見た顔だ。娘も生きていたらこのくらいになっていたかも
知れない。

まさか…そんなはずがない。

「あの、家に何か御用でしょうか」

妻は動揺しているのか、少し震えた声だ。

少女は柔らかく微笑む。

妻の微笑みにそっくりだ。

「お久しぶりです、父さん、母さん」

昔聴いていたあの声がした。

「サクラ…なのか？」

「はい」

静かに、しかしよく通る声で返事をしてきた。

お互いに机を挟んで座っている。

先ほどは大変だった。

妻が桜のことを抱き締め、泣き出してしまった。そんな2人を必死に家の中に入らせた。

「桜、おまえは病気で亡くなったと聞いたんだが」

「それは違います」

桜が一呼吸置く。

「魔法…信じる？」

「魔法？」

「はい。この世界には魔法が存在します」

「……冗談…ではないか」

桜の瞳は清んでいて嘘をついている感じではなかった。親バカかも

知れないが。

「あの日、病院に入院したあと、ある研究所に連れて行かれました。そこは違法の研究所で、人体実験を平気で行っていました。私も例外ではありませんでした。色々な実験をされました。髪の色も変わってしまいました。とても痛かったです。気が付いたら助けだされていました。それから私はその世界の警察組織に入りました」

「そうか」

「今日は別れの挨拶をしにきました」

「別れ？まで、私たちとまた暮らさないのか」

「暮らしたいですよ。暮らしたいですけど、この世界ではもう、私は死んでいるんですよ」

言葉を発することが出来ない。ただ一言、そんなことは関係ないと言えば良い。だけど…そうやってしまうことは出来ない。法的にも公的にもすでに娘は存在しないのだから。

「手紙を書こう。おまえをそこまで育ててくれた人に」

リビングをでて自室に向かう。ペンをとり、言葉が通じるか解らないが、ただ思いを感謝を悔しさを書き連ねる。

数十分は過ぎた。

出来上がった手紙を持って、リビングに向かう。

「これを」

手紙を娘に差し出す。

それを受け取り、暫く眺めた後、鞆にいれた。

「ありがとう」

玄関で桜が振り返らずに発した。

「私、月島 桜は世界の全ての人に対して秘密にしていることがあります。それは両親にもです。この秘密が無ければ、両親と暮らせていました」

ドアノブに手を置きながら、桜は告白した。

「二度目の…人生にならなければ」

その言葉を最後に桜は去っていった。

私達はあの娘が無事であることを願っただけだ。

転生者に恋する者達(前書き)

実は原作を見たことない。

「転生者に恋する者達」

「夜神 はやてを知っているか」

レジアスが名前を口にする事すら拒否する位の思いで発する。

「知っています。若手のエリートさんですね」

月島 桜が少し考えるそぶりをした後に答えた。

「そうだ。あの子狸は陸の現状も理解していない癖に五月蠅い。やれ行動が遅いだの、やれ人員を割きすぎだのとな」

「それはまた、本局と比べたんですかね。困ります」

「まったくだ。文句をつけるだけでなく、少数の高ランク魔導師による、少数精鋭の部隊を創設すると言っ」

「失礼ですが、馬鹿なんでしょうか？」

レジアス中将の言葉に私は呆れるしかなかった。

少数精鋭、聞こえは素晴らしいが高ランク魔導師を一点に集中させるのは良くない。その部隊に頼りきりになってしまい。他の部隊の練度が低下してしまう。均等な戦力を配置できない。

「奴らは機動六課なるものを陸に創設する」

レジアスがデスクの引き出しから何枚かの資料を取り出した。

「夜神 はやて、高町 なのは、フェイト・T・ハラOWN、ヴォルケンリッター。今、分かっている部隊構成だ」

ヴォルケンリッターか。私が人体実験されている間に地球で起こった、闇の書事件の容疑者で何人もの魔導師の人生を駄目にしてきた。主のために、他の多くを犠牲にしてきた。主のため……聞こえはいが、やってきた事は褒められるものではない。

「予言が原因だ」

何？

「予言ですか？」

「聖王教会のカリム・グラシアが持つレアスキル。それが予言だ」

「つまり、新設部隊の機動六課を潰せつてことか」

デスクに足を組んで乗せているレイアーノがやる気無く答えた。その目には興味の一欠片も見えない。

だらしないうレイアーノを見たスードロはムツとした顔をしている。行儀の悪いレイアーノが許せないらしい。胸の内ポケットから懐中時計を取り出した。

「バーンレプオス、セット」

「スー、ストップ!!」

桜がレイアーノとスードロの間に身体を割り込ませる。

レイアーノとスードロは2人だけにすると仲が悪くなる。

レイアーノはスードロの真面目くさった模範的な態度が気に入らない。

スードロはレイアーノのだらしなさとふざけた態度が気に入らない。しかし決して仲が悪いわけでない。お互いのそういう所だけが合わないだけで、それ以外は良好なのだ。談笑したり、食事に行ったりと男の友情?を持っている。

「止めないで桜。今日こそソイツの顔面に後悔と懺悔を刻みつけてやるんだ」

「やってみ」

「上等です。おもてに出る!!」

「桜、戦闘許可貰ってこい。アイツを潰すから」

勝手にヒートアップする2人に呆れるしかなかった。このまま放っておいてもいいですけど、周りの目があります。仕方なく一歩踏み出す。

「許可は出せません。落ち着いてください、2人共」

手を叩きながら、事務的に対処する。もう20から先は数えてられないほど続いてきた2人のやり取り。

「しかたねえ、。桜に免じて許してやる」

私に免じないでください。私は今、困ったような笑みを浮かべているかも知れません。

2人を落ち着かせるためにコーヒを淹れにいく。

戻って来ると2人は尻尾が有ったら、ちぎらんばかりに振るくらい、キラキラした瞳をしていた。

「えーっと…どうぞ」

順番にカップを渡していく。

はい…「ガシッ」…はい!?

スーことスードロにカップを渡そうとしたら、私の手を包み込む様に握りしめてきた。危ないよ。

「桜、有り難うございます。君の淹れたコーヒーを飲めるなんて、ボクは幸せだ。……桜、けっ」

初めての行為に脳が停止してしまっただが、何か鈍い音と、スーが頭を押さえながらしゃがみ込んでいるのを見て、復帰出来た。

スーの後ろには薙刀型デバイス「ニトクリス」を振り下ろした体制のレイアーノが立っていた……って!!

「レイー!!何デバイスを展開してるんですか」

どうしてこつも暴力的なのでしょう。玉神様、私何かしましたか？

「だって」

「だって〜じゃありません」

……………はあ。

会議は踊る、されど進まず。

管理局地上本部『特殊戦闘技術教練隊』。

オレたちが今から入る場所の名前だ。しかし、長いぜ…名前が。すれ違う陸の局員が敵意を向けてくるが、気にしない。モブキャラが、消してやるうか。

「ごめんな、アカツキくん。本当はもっと早く、呼ぼうとしたんやけど、周りが五月蠅くてなあ」

オレの右側を歩く夜神 はやてが申し訳なさそうに言ってきた。

「気にすんな」

なんたってオレはオリ主だからな。なのはにフェイト、はやてやヴ

オルケンリッターの女性陣はオレのモノだ。優しくするのは当たり前だろ。最近起こった『スペリオル』事件でオレの幼馴染み兼嫁の1人の月島 桜が管理局に入っていることを知った。髪の色が薄いピンクになっていた。そのせいか、可愛くなった。ただ、気に入らないことがある。桜の隣にいる知らない男どもの存在だ。オレの嫁に汚い手を出すんじゃないねえ。

今日は桜を引き抜きに来たんだ。なのはの独占欲やフェイトの天然はやてのイタズラも良いが、桜の包容力も欲しい。

指定された会議室でなのは、フェイト、はやてと待つ。おせえな、レジアス。

暫く、苛々しながら待っていると会議室の扉が開き、レジアスを先頭に桜、紺色の髪、灰色の髪が続いて入室してくる。レジアスを除いた3人は暗い緑色をした見慣れない管理局の制服を着て、ローブを羽織っていた。

「久し振りだな、桜」

「そうですね」

桜は優しく微笑みながら応えてくれた。

それを見た負け犬2人が此方を睨み付けてきた。

桜が2人に気が付いたのか、困った様に笑うとなだめ始めた。

オレが桜に声をかけたのが気に入らないのか、なのはとフェイトは機嫌が悪い。仕方なく2人の頭を撫でる。はやてとあからさまに、レジアスはムスツとした顔で睨み合う。

会議は踊る、わだかまは進まず。

様々な進展（前書き）

関西弁は無理っす

様々な進展

「ああ！！何や、人の足もとを見て」

地団駄を踏むはやてを冷静に見ながら、内心苛ついていた。

「はやてちゃん、落ち着いて」

「そうだよ、はやて」

なのはとフェイトがなだめている。

怒るのも無理はない。陸戦魔導士の教官として、桜を引き抜きに来たが、拒否られた。高ランク魔導士が沢山集まっているのに、まだ欲するのかと。陸で活動するくせに、陸の局員をいれていないんだと。桜を引き抜きたいのなら、そちら側の高ランク魔導士を3人削れ、勿論呼び戻し不可。陸の管轄なので、陸戦魔導士の桜の意見が優先されるなど。レジアスの野郎、図に乗りやがって。

まあいい。桜を落とすのは遅くなるが、優しいから待っていてくれるだろう。ひとまずは、ティアナとスバルを攻略するかな。

苛つく…イライライライライライライライライライライライ苛つ

きますす！！

スードロ・ハグルトは貧乏揺すりをしていた。本人に自覚はないが、その姿を見た隊員たちは皆、願った。

月島隊長：早く帰って来てください。

今のスードロを止められる桜は事件が発生し、陸士の応援に行った。戦技隊は基本的に他の陸の部隊に応援要請されたときか、レジアス・ゲイズの命令があったときに出勤する。何もない時には、戦闘技術の向上を目指した訓練をしている。

「あの…」

1人の局員がスードロに声をかける。誰もが、その局員を勇者だと思った。

「あん？」

ギロつと睨みつけてきて、局員は呼吸が止まりかかった。冷や汗で背中が濡れていた。

味方潰しのハグルト。

自らの上司の渾名がよぎる。やさぐれていた頃のスードロがいた部隊は必ず10人の負傷者もしくは殉職者がでるという意味で付けられたものだ。

「じ、実は先ほど、ホルスの1人から報告がきました」

「それで」

下らないことならどうなるか、わかっているよな。そんな声が聞こえてくる。

「は、はい。我々が追っている『斬殺卿』の拠点が判明しました。現場の陸士部隊から応援要請がありました」

スードロは暫くの間、止まった。

立ち上がり、隊員たちに向けてニッコリと笑った。

「丁度いいですね。潰しに行きましょう。さあ行きましょう、とつとつと行きましょう」

とても…とても爽やかな笑顔だった。

2人の少女が走っている。正確に言えばオレンジっぽい髪の少女を青っぽい髪の少女がおぶってローラーブレードみたいなので走っている。止まることはたぶん考えていないだろうがな。

コーヒー片手にその様子を見ていたレイアーノはため息をついた。レジアス・ゲイズの命令で部下1人を連れ、機動六課が引き抜きを行おうとしている陸士の力量を計りにきた。

「諜報なんてホルスの連中にやらせばいいじゃねえか。何だって俺たちに白羽の矢がたったんだ」

後ろに控えている部下に問いかける。

「ホルスの殆んどは休暇中や新人訓練です。残りは『斬殺卿』の拠点を探し回っているそうです」

「あん？この前見つけたはずだろう」

確かスードロが嬉しそうに現場に向かったと聞いたんだが。

「あれは、殺しの現場らしく、拠点ではないそうです」

「ガセネタか？」

「いいえ。ホルスの新人がやらかしたようです」

後ろから疲れた声がする。

「だから新人の訓練か」

つまり、俺達は被害者だな。新人どもがミスったせいでこんなくだらない指令が回ってきたのか。

「ちなみに、この任務が回ってきたのは、ハグルト隊長が斬殺卿を探すため、ホルスを引っ張って行ったからです」

耳に入ってきた言葉に俺はキレた。

後ろにいる部下に任務を任せ、ここまで来るのに使ったバイクに跨がる。後ろで誰かが何か言っているが、しらね。

レイアーノ…いくぜえ！！

「アンチ・マギリング・フィールド、厄介ですね月島隊長」

ロストロギアの裏取り引きを陸士の部隊が発見した。彼らは戦力を分析し、すぐさま私達に応援要請が来た。私が率いるストライク分隊が現場に到着すると、既に戦闘が開始されていた。いやいや、何してるんですか！？

直ちに先行部隊の援護を開始した。

ロストロギアの売人の逮捕、およびロストロギア「レリック」を確保した。売人が巻き添え覚悟でレリックを暴走させようとした時には、焦った。ジュエルシードを使って暴走を止めなければ大変なことになっていました。無断使用ですから後で始末書を書かなければなりません。警察の拳銃発砲の始末書と同じです。

問題は事件の解決を見計らった様に、今ちまたを賑わしているガジエト・ドローンが現れたことです。陸士部隊は苦戦しているようですが、私達は違います。戦技隊は魔力よりも戦闘技術を重視した部隊なのでAMFの影響下にあってもあまり支障にならない。

「3人一組で殲滅。油断はしない」

杖型デバイス『ラピエサージュ』を振り回しながら、指示を出す。

魔力を纏わせたデバイスで次々破壊していく。

「きりがありませんね。ラピエサージュ…モード『斬艦刀』にて全て破壊します」

ラピエサージュの先端が左右に展開する。

「カートリッジ…ロード」

ラピエサージユから薬莖が吐き出され、淡い桜色の魔力刃が生成される。刃渡りは三メートルはある。

一気に駆け出し、敵の配置の中心へ向かう。立ち塞がる敵は分隊の者が破壊もしくは足止めする。

「全員動くな」

身体ごとデバイスを振り回す。

巨大な魔力刃の猛攻に為す術もなく破壊されるガジエト。ものの数秒で全滅に追い込む。

「状況確認」

振り回すのを止めて、デバイスを基本形態に戻した後、周りに呼びかける。

ガジエト・ドローンはレリックに反応して現れたのでしょうか。

報告を耳にしながら、何故ガジエトが現れたのかを考える。

自らのデバイスを見ながらため息をついた。

転生してからというもの、次から次へと厄介です。

2つの防戦（前書き）

飛ばしていきます、物語

2つの防戦

朝、戦技隊に到着すると、レイアーノとスードロがお互いの胸ぐらを掴みながら睨みあっていた。

どという経緯でこの様な状態になったのか、近くの隊員に聞いてみた。レイアーノが任務を投げだして、スードロに喧嘩を売りに行った。現場で2人は罵り合いながらも連携で『斬殺卿』の模倣犯を捕らえたらしい。偽者相手にホルスをありったけ使うなどレイアーノがキレて、その言葉に虫の居所が悪かったスードロもキレた。それを現在まで引き摺った結果が今であると。

誰でも良いから止めましようよ。

呆れながらも、この前レイアーノがほったらかした件の報告書を読む。

機動六課が獲得した新人は2人。スバル・ナカジマとティアナ・ランスター。

「これ、結構前の報告書ですね」

隊員達を見ると皆、まだ睨み合っている2人に注目した。報告書の提出が遅かったんですね。困ります。

ホテル『アグスタ』で行われる骨董美術品オーデイション。機動六

課は少数で警備にあたるようです。正直、警備を舐めているとしか
言えません。レジアス中將もそう思ったのか、僕等ブラスト分隊と
ロングレンジにアグスタの警備を言い渡しました。気乗りしない任
務です。警備の素人共が足を引っ張らなければいいんですが…無理
ですかね、戦闘…始まっていますし。…暫く観てましようか。

ルーキー達の動きはまあまあですね。特化型みたいです。4人一組
のチーム、悪くありません。がしかし、陸士の戦い方ではない。わ
ざわざ障壁を張って防ぐなんて、魔力の無駄です。

「隊長、攻撃命令が出ました」

連絡要員が報告する。

「じゃあ、始めますか。ロングレンジは遮蔽物に身を隠しながら、
遠い敵を狙ってください。ブラスト分隊、行きますよ…！」

デバイス『バーンレプオス』を展開、戦闘領域に踏み込む。

ガジェットも此方に気付いたのか、何体かが向かってくる。

一番近い距離にいたガジェットにパイルバンカー型デバイスを突き
刺し、バンカーをぶちこむ。

いきなりの援軍に機動六課は驚いている。余所見するなよ、死にた
いんですか？

暫くの攻防がすぎ、ヴィータと言う、幼女の罵声が聞こえる。…な

にしてんすか。

「自分たちの教育不足の説教なら余所でやれ。邪魔ですよ!!」

思わず叫んだ僕に罪はない。

「戦闘機人が何のようだ」

ロストロギア『レリック』を輸送中に襲撃を受けた。前回、桜が裏取り引きの際押収したモノだ。聖王教会に向かう最中に前方から投げナイフが地面に投げられ、爆発した。すぐに輸送車を止めて、そこから離れる。

前方には、白髪の少女が佇んでいた。手には先ほど爆発したナイフを構えている。

「レリックを渡せ」

なるほど、やはりこれが狙いか。桜の言った通りだな。

俺達が5人しかいないとアイツは判断して、ガジェットを展開する。幾つかのタイプで30体程だ。

俺とその周りがセットアップする。薙刀型デバイス『ニトクリス』を展開し、上空に電撃を放つ。

戦闘機人は俺の行動に疑問を浮かべ、動きが止まる。瞬間、あたりに浮かんでいたガジェットの群れが次々と落とされていく。戦闘機人は驚愕の表情を浮かべている。

「いやあ、オマエ等の奇襲に備えてアサルト分隊の大半を隠しておいて正解だったな」

こんなに上手くいくとは。

焦りを感じたのだろう。俺を倒そうと敵が向かって来ながら、ナイフを投げる。ニトクリスで左右に弾き、爆発しても被害がないように、飛ばす。相手のナイフは限りがあるのか、回収しながら戦う。

片手で薙刀を振り回しながら、突っ込む。敵も手に持ったナイフで向かい撃つ。突きに横薙ぎと力を乗せての攻撃に、受け流すことをしない敵は耐えられず、ナイフを弾き飛ばされてしまう。

「残念だなあ！！」

右腕を斬り飛ばす。残った腕を掴み引き寄せ、背中に肘を打下ろす。地面に倒れた相手にバインドをかけて、捕獲する。

「……弱いな」

レイアーノが戦闘機人を捕獲してきた。白い髪の少女だった。ロープでぐるぐると縛り、肩に担いできた。

「レイ、君に幼女を誘拐するような趣味があるなんて、見損なったぞー！」

たぶんわざとだけど、スードロが指を指しながら叫んだ。

「ちげえよー！誤解すること平気で叫ぶんじゃねえ。……いやいやー！！桜まで、後退りするなよ。信じてくれよ」

「ごめんなさい。少し引いた私が居ました。」

「信じてやるよ…君の性癖を」

「何で煽るんですか。話がまったく進みませんよ。」

「そこを勝手に信じるな」

「まず、その娘を降ろしたらどうでしょう。誤解され続けられますよ。」

「何で皆そんな冷たい目で見てんの！？軽蔑の眼差しってこれ！！
……何でかな、涙出てきた。泣かないって決めてたけどよ」

担がれている戦闘機人の娘もどうすれば良いか分からないようで、
此方を見つめてきた。…とりあえず、微笑みながら手を振る。
流石に私もこれを止めるのは無理です。

戦闘機人の娘も私が助けたくないとは分かると、悲しそうな顔をしていた。

「ともかく、こいつをどうするかだ！！」

担いでいた相手を椅子に座らせ、デバイスを起動させながら言った。
周りもこれ以上は不味いと分かり、レイアーノに土下座した。

「日頃の行いが悪いんですよ」

スードロは当然だと言わんばかりに、私を抱き寄せた。

「……！？」

肩に置かれた手は暖かく、優しく感じられた。

いきなりのスキンシップに私が啞然としてみると、ゴン！！と鈍い音が近くで響き、スードロが頭を抱えていた。

「何をしている、ハゲルト？」

後ろを振り向けばレジアス中將が拳を振り下ろしていた。…あれ？似たような光景ですね。

「大丈夫か、桜」

レイアーノが私を抱き締めながら、心配するように言った。

大丈夫じゃありません、主に貴方のせい。

この後、レイアーノもレジアスの拳に没した。私は一緒に来ていた、オーリス義姉さんに抱き締められた。……何も進んでないんですけど。

地から墮ちる陸（前書き）

チンクが仲間になる…ありきたりかな

地から墮ちる陸

「ご飯はちゃんと食べないと駄目ですよ」

「別に必要ない」

「誰から貰ったかは知りませんが、その手に持っているバランス栄養ブロックを渡しなさい」

結局、戦闘機人『チンク』は戦技隊で監視する事になった。暴れる可能性があるのです、主に私が面倒を見ることになった。

チンクは左腕をレイアーノに切り落とされて、体のバランスが取れていない。日頃何か取り調べがあると、私が補助について連れていく。なんだか最近チンクが妹の様に思えてきた。

あっちがどう思っているかは知らないが、常識も欠如しているらしく、時間がある時は何か教えることにしている。

いつかは分からないが、また敵対する事があるだろう。もし私の前に立ち塞がることがあれば、容赦無く撃ち落とす。

機動六課がレリックを確保した。

特殊戦闘技術教練隊広域諜報部隊『ホルス』からの報告がアサルト分隊に届いた。オレ達はすぐさま現場に赴くと、大量のガジェットが機動六課のへりに群がっていた。1人の男が防衛しているが、幻影が混じっているらしく上手くいってはいない。

少数精銳の穴が出てきたか。数の暴力や戦力の分散に対応しきれない。

ニトクリスを展開して、部下に指示を出す。空戦が可能な者にへりの護衛をさせる。敵が何故六課のへりを狙っているのかは知らない。レリックを輸送しているのか、誰か重要な人物を乗せているか。…レリックはないか。

邪魔なガジェットを次々破壊していく。装甲のひしゃける音、手にくる装甲の抵抗力…快…感…！

薙刀型デバイスを頭上で振り回し勢い付ける。

カートリッジ…ロード。

「サンダーネット」

一発の電気の弾丸を飛ばす。そこいらのシューターとは比べ物にならない位の速さでガジェットに接触する。命中したガジェットから電撃のラインが伸び、他のガジェットに繋がる。繋がったガジェットからさらに他のガジェットにさながら蜘蛛の巣を形成するように繋がっていく。まあ蜘蛛の巣とは言うものの三次元に繋がっていくからその名前は不適切かも知れないな。

一通りに繋がるとガジェットが放電を始めてもろとも周りのガジェ

ツトどもを一掃した。

空を見ると、アサルト分隊の3人一組のチームが遠距離砲撃を防いでいる最中だった。

すぐさま動ける隊員を砲撃の発射位置に向かわせる。距離が遠すぎて確保は無理だろうか。

今の持ち場が最優先だ。

「地上本部にチンクを移すんですか？」

隣を歩くレジアス中將に問いかける。

「そうだ」

苦々しく答える。レジアス中將も納得出来ないのが分かります。私も納得はしていません。唐突に地上本部の局員が訪れて、戦闘機人を引き渡せと言うのだから。横暴だと思えます。レイアーノの手柄をとっていく…許せませんね。

地上本部はハッキリ言って落ち目と言って良いかも知れません。最大の権力者であるレジアス中將、陸のエースといつの間にか呼ばれていた私、レジアス中將を支えていたオーリス姉さんの3人が特殊戦闘技術教練隊を創設してしまい、陸の誇っていた結束力が崩れた。広告塔の私が戦技隊にいるものだから、新人達は此方に来てくれる。

陸の戦力低下に貢献していますね。戦技隊は面接や実技で少数の新人もしくは転属希望の局員を採用してますから、あまり関係ないですけど。

陸は権威を再び取り戻す為に戦闘機人を奪いにきた。情報を聞き出し、有効な対策を考えるのだと思いますが、もう遅いと言って良いですね。陸の訓練は隊によってバラバラで練度に差が出来る。戦闘機人もしくはガジェット対策を手にしても扱える隊が限られる可能性が出てきます。

……それに、チンクの爆発の力は敵にとって重要な戦力になる。必ず取り戻しにくる。そうしたら陸の権威はどん底に墮ちるでしょうね。

横を向くとレジアス中将の表情が何処と無く楽しそうだった。

「全部…口に出してたぞ」

……！？

顔が熱くなるのを感じた。
凄く恥ずかしい。

陸が問題を起こした。戦闘機人に逃げられたのだ。わざわざ僕等が捕まえた戦闘機人『チンク』を陸が横取りしていきやがりましたが、因果応報と言うのですかねこういうの。責任追求を名目にブラスト分隊使つて攻め込みましようか？

陸の唯一の生命線は毛嫌いしている機動六課のみですね。あの部隊

散り逝くは変化の花（前書き）

感想と言うよりは、訂正と提案みたいなモノを頂きました。わざわざ有難う御座います。

散り逝くは変化の花

天使が舞い降りてきた。

知らない奴が立ちはだかる。

願いを叶えてあげましょう。

それは心地よい歌声のよう。

それはイカれた勧誘のようだ。

わたしは貴方を必要とします。

必要としてくれるのが嬉しくて。

必要と言うのが気に入らない。

手をさしのべてくれた。

手を出してきた。

その手を掴み、立ち上がる。

その手を掴み、引つ張り倒す。

自分の思いを相手に伝える。

管理局地上本部の襲撃。大量のガジェットによるAMFの前に管理局の陸士達は次々と倒れていく。地上本部にいた機動六課の隊長達のおかげで壊滅することはないが、壊滅的な被害を被った。機動六課も襲撃を受けた。隊舎の至るところが崩れ、死傷者も数名出た。その中にシャマルとザファイラの名前があつた。

98

「聖王のゆりかご。それが敵の切り札ですか」

戦技隊の会議室で私達戦技隊の隊長陣とレジアス中將が集まっていた。

「そうだ、我々はその切り札の停止を機動六課に任せて、地上の防衛をする」

「いきなり他力本願だな、レジアス義父さん」

「口の聞き方に気をつけてください、レイアーノ。そうですね、
義父様」

何言ってるんですか、2人共。

「やらんぞ」

そっちの話は置いてください、レジアス中将。

「兎に角、防御に徹していればいいんですね」

私が話を戻すしかない。

「うむ、機動六課が名乗り出たのでな、全て任せしておく」

「じゃあ、任せましょう」

わざわざあんなデカブツ相手にするなんて、機動六課も変わってますね。アカツキ達は何を考えているのでしょうか？私は御免です、
疲れますしね。

「機動六課が失敗したら」

一番の疑問をスードロが聞いた。私も思っていました。

「次元航行船スペリオルと同じ方法で、破壊する」

レジアス中将：あれ、負担が凄いかかるんですけど。軽々しく言わないでください。

「あの時とは標的が違いますよ」

ナイスです、スードロ。

「心配ない。聖王教会から残りのジュエルシールドを徴収してきた」

長机の上にアタッシュケースを置いた。

初めて機動六課の作戦成功を願った。

管理局の存亡を賭けた戦いが始まった。今まで以上のガジェットの群れが管理局員に襲いかかって来た。

オレは群がるガジェットを破壊しながら、なのはとヴィータの援護に向かう。2人が聖王のゆりかごに突入出来る様に道を切り開いた後、暫くガジェット共の相手をしていたが、そろそろヴィヴィオを助けに行くか。オリ主であるオレの力があれば、誰もがオレの虜だ。ヴィヴィオはオレの娘になるからな、なのはやフェイト、はやて達と共に愛でてやるぜ。オレの勇姿を見れば、桜もメロメロになる。

オレが将来のビジョンを描いていると、大勢の修道服を着た男女が歩いてきた。

聖王教会からの援軍か。

彼らは一定の距離まで来ると立ち止まり、デバイスを展開し始めた。

「此処はいいから、他の所に行きな」

オレが居るんだ、雑魚はいらない。

「我々は聖王を保護しに来ました」

あん？

「聖王様は我々の上に立ち、次元世界に恒久的な平和をもたらして

くれます」

おいおい、何を言ってるんだ。ヴィヴィオはオレのもんだぜ。

「管理局が創りだした平和など、このような事で崩れさる。聖王様ならこんなくだらない争いを起こさせはしない」

先頭に立っていた男が高らかに言うと、後ろに控えていた男女が突撃を開始する。

クソ！！雑魚キャラの癖に。

剣型のデバイスを振りながら、舌打ちをする。
向かってくる敵を倒す、倒す、倒す。しかし相手はすぐに立ち上がり、デバイスを突き出してくる。

「あが！？」

デバイスを持つ腕に槍が刺さる。

何で…刺さった！？……非殺傷設定のはずだろ！！

一瞬の思考のうちに次々とデバイスが突き刺さる。

痛い！？痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！
腕を裂かれ、足を潰され、目はくり貫かれる。

数秒後、転生者にして管理局のエースの鬼道 暁はただの肉片になった。

「ストライク、アサルト、ブラストの各分隊、ガジェットと交戦中」

部下の報告を簡易指令室で聞きながら、レジアス中将は待っていた。周りには腕利きの部下が4人ほどいるだけだ。先ほど報告してきたホルスの1人が指令室を出ていくと入れ替わりに1人の女性局員が入ってきた。

「何かようか」

「レジアス中将に報告があります」

レジアス中将と女性局員は一定の距離で向かい合っている。

戦技隊の人間ではないな。

レジアス中将の二メートル程右側に控える仲間を目配せをする。

「どんな報告だ。内容を」

レジアス中将は自然な様子で後ろに腕をやり、我々に警戒を呼び掛ける。

「貴方の死亡を報告します、レジアス中将!!!」

女性局員の爪が突き出される。まっすぐ心臓を目指すが、巨大な盾に防がれる。

「な!?!」

「何を驚くか。このような距離で仕留めることが出来る訳がない」

レジアス中将と女性局員の間を展開したデバイスと共に滑り込ませる。

「特殊戦闘技術教練隊対戦防護部隊ガードフォース隊長シユタルク・シルト」

盾に力を入れ、相手を押し返す。

「いくら隊長でも、あの3人ほどではない。すぐに方を付ける」

「高々戦闘機人の分際でもよくも強くでれるな」

お互いに戦闘体勢をとる。

「名は何だ、戦闘機人」

「ドゥーエ」

ただ構える。我々は対象を守るだけだ。敵を倒す等と言う芸当は出来ない。戦技隊の中では、一番知名度の低い部隊だ。誰かを傷付ける事を恐れる。管理局に居場所がなかった臆病者の集団だ。我々は攻撃など出来ない。だからこそ、絶対的に守ることができる。

ドゥーエが放つ攻撃を防ぐ。それ以上もそれ以下もない。

「しっこい！！」

何度も防がれ、焦りがでてるのが分かる。だがもう遅い。

「ドゥーエよ、我々の勝ちだ」

我が言葉を合図に駐留部隊が雪崩れこんでくる。

「我々は守りきるだけだ」

戦闘機人ドゥー工は戦技隊に始末された。

咲き乱れるは桜の花（前書き）

分かり辛い戦闘シーンに意味が分からない台詞。後は最後にネタ技。

咲き乱れるは桜の花

ガジェットが進軍によって瓦解した場所。かつての街としての面影は今は無い。そんな破壊されたエリアで、レイアーノと戦闘機人『チンク』は向かい合っている。武器を構え、何回目かの攻防を行った後だ。

最初に出会った時には圧倒していた闘いも今は均衡を保った状態にある。

チンクが投げナイフを投げて牽制しながら駆け寄り、レイアーノはナイフを弾きながら片足で跳躍して距離をとる。

「そろそろ諦める」

「キサマがな」

右足は爆発の攻撃で焼けただけ、力を入れると耐え難い痛みが走る。

何度も粘る。

チンクは少し焦りを感じていた。レイアーノが攻めて来ずに、此方の攻撃を回避するばかりだ。

援軍を待っているのか？だとしたら早急に倒さなければならぬ。

『ステインガー』を構え直し、更に攻める。相手の後方にステイン

ガーを投げて、逃げられないようにする。相手は私の目的に気付き、雑刀を身体ごと後ろに振り回し、ステインガーを弾き飛ばす。

もらった!!

ステインガーを投擲して、この闘いに終止符を打つ。

しかしレイアーノは振り回した武器を右側の地面に突き刺し、それを軸に身体を浮かして回避する。

「舐めんな!!」

乱れた呼吸を整えながら、必死に叫ぶ。

流石に此方も体力的に限界が近い。……それが狙いか!!

「体力を消耗させて動きが止まったところを討つ、といったところか」

残念ながらばれてしまったな。

「何を言ってるんだ？」

「とぼけるな」

「とぼけるも何も、足をやっちゃってるから、オマエが言っような事は出来ねえよチビ」

チ、チビだと!?

「うるさい!!少しは成長している!!」

スティングアーを構え、投擲しようとする。

カートリッジ…ロード。

呟かれた言葉が聞こえる。小さく言われたはずだが、耳元で言われた様に聞こえてくる。

「な!？」

目の前に居たレイアーノが姿を消した。

幻術か!?

レイアーノが立っていたであろう地面にスティングアーを突き刺し、ラ

ンブルデトネイターを発動させる。しかし相手は現れない。

カートリッジ…ロード。

同じ様に耳元から言ったのではないかと言う位ハッキリと聞こえてきた。

瞬間、右腕の感覚が無くなり、軽くなった。

何かお腹を突き破る感覚がすると、そこが熱くなっていく。

地面から浮いている。

そんなことを思っていると、目の前にレイアーノがいるのに気づいた。

「カートリッジを一発消費する高速移動魔法、電光石火だ」

皆、不甲斐ない姉を許せ。

どこもかしくもボロボロですね。

ガジェットを探し求めてあっちへふわふわ、こっちへふわふわ。壊したガジェット数知らず。

「ハグルト隊長」

部下の1人が話しかけてくる。

「何か」

「彼方の方にガジェットが固まっています」

部下がまさしく彼方の方向を指差す。

「誘っているんですかねえ」

ガジェットは僕等を認識しているはずなのに、動くことをしない。後ろには廃ビルが建っていますし。自分に有利な地形で戦つか、罠が張ってあるか。

「とりあえず、行ってきます。後は任せます」

廃ビルへと歩みを進める。邪魔なガジェットを破壊して、中に入る。中は広く、太い柱が幾つもの天井を支えている。

柱に隠れて戦う…では此方も使える普通の戦い方ですね。

部屋の中央まで歩く。敵がどういう意図で此処に誘い込んだか分かりません。

デバイスを構え、周囲を見渡す。

刹那、背中に衝撃が走る。

後ろですか!?

振り向くが誰もいない。

また背中に衝撃が走る。

後ろを振り向き、サイドステップで位置を変える。何かがさっきまで居た所を通り過ぎる。

「あれ？外しちゃった」

水色の髪の戦闘機人がいた。

「どちら様ですか」

「あたしの名前はセイン。あんたは？」

セインですか…戦闘機人の分際で名乗りますか。自信の現れか、ただの馬鹿ですね。

「アサルト分隊隊長スードロ・ハグルト」

お互いに名乗りを挙げましたので戦いますか。

デバイスを構え直す。

「勝てないよ…あたしには」

戦闘機人セインは地面に沈みこむ。

「嘘でしょう!？」

此方は攻撃を受け、当てることが出来ない。相手は壁や柱、床、天井と様々な所から現れ、攻撃してくる。

「圧倒的ですね」

冷静に言うが身体は限界に近い。そろそろ決着をつけなくては。

地面にパイルバンカー型デバイスを向けて打ち込む。衝撃で粉塵が

舞い上がる。一時的に視界を奪い、時間を稼ぐ。周りが見える様になると、セインの攻撃が再開される……はずだった。

「あれ？何で…身体が」

空中で制止したことを疑問に感じた様だ。

「バインドですよ」

セインにバインドをかけ直し、四肢を拘束する。

「視界を奪ったのはバインドを仕掛ける為です。とりあえず僕の周りに配置しました」

カートリッジ…ロード。

デバイスから薬莖が二発吐き出される。

空中で拘束されているセインにデバイスを突き刺す。

「非殺傷設定ではありませんが…戦闘機人だから大丈夫ですよね」

セインの腹部に必殺の杭が打ち込まれる。

もの凄い音がビルの中に響く。

「ああ、大丈夫ではなかったですね」

ニコニコ笑いながら空中でバインドがかかった、胴体を失った戦闘
機人の四肢を見つめる。

「そこを退いて貰おう」

「何の御用ですか」

2人の男女が向かい合っている。男は槍を、女は杖を持っている。

「レジアス・ゲイズに会いに来た」

「アポは取りましたか？」

男は眼を閉じると暫くして、決心したように眼を開ける。

「ゼスト・グランガイッ」

「月島 桜」

「参る」

「行きます」

お互いのデバイスがぶつかり合う。縦横無尽に振り回し、命を刈り取るごと。

「なぜ管理局いる」

「はい？」

激しい攻防の中、ゼストが問い掛けてくる。

「オマエは管理局によって人体実験された。それなのに」

「何故…管理局にいるのですか？簡単ですよ。助けてくれたのも管

理局だからです」

「そうか」

ゼストの槍が肩を掠める。

「と言っのが少し」

「何？」

私の蹴りがゼストの左腕を打つ。

「どうすれば良いか分からなかったんですよ。意味も無く殺され、理由も意味も無く二回目の人生を強要されましたから」

心の奥底に押し込んで、誰にも言わなかった思いを吐き出していた。

「何を言っている」

「分からなくても良いですよ。理解なんて求めていませんから」

そう、理解はいらぬ。私が一方的に喋るだけだ。どちらかの命を刈り取るまで。

「ただ普通に暮らして昔出来なかつたことをしてみたかつた。ですが、魔法なんて言う訳の分からないモノに巻き込まれ、三回も死にかけました。気づいたら故郷では死亡扱い。両親と暮らすことすら許されない」

横薙ぎに振るわれた槍を伏せて回避して、立ち上がる勢いでデバイスを突き出す。

「戦技隊を設立したのは正義の為です…なんて御高いことは言いません。ただ理由が欲しがつたんですよ。自分だけが理由が無いと嘆いていました。でも理由を持っていない人達がいることを知りました。彼等は切っ掛けを与えたら、理由を持って行動し始めました」

杖で槍をいなして、拳を、足を叩き込む。

「最初嫉妬ですよ。でもね、暫くして彼等に告白されました。勿論お断りさせて貰いましたが。彼等が私を必要としてくれる。それがとても嬉しかったんですよ。生きる理由ができました」

「つまりは何を言いたい!!」

「負けないということですよ」

ゼストの腹部を蹴った勢いで距離を取る。

暫し止まり、睨み合う。

……瞬間、互いに走り出す。

ゼストの槍が右腕の付け根を貫き、桜の右手がゼストの槍を掴む。

「勝負はついた」

「まだですよ」

「何？」

ゼストは疑問を浮かべている。無理もない。桜の右腕の付け根に刺さった槍に力を入れれば切り落とすことが出来る状態で、桜は勝利を確信した顔をしているからだ。

！？

「気づきました？身体が動かないでしょう」

「何をした」

身体を動かそうとゼストは必死になっている。

「ジュエルシードに願いました。貴方を止めるように」

「しかし」

「ジュエルシードを取り出してない、ですか。実は身体に2つばかり同化しています」

カートリッジ…ロード

ワン…ツー…スリー…。

カウントと共に薬莢が三発吐き出される。

「昔から憧れる技があつたんですよ」

右腕の痛みを我慢しながら。

「再現してみたら、凶悪な技になってしまいました」

片足を上げて、蹴りの構えをとる。

「ライダー…キック!!」

淡い桜色の魔力を纏った蹴りが放たれる。

もの凄い衝撃が起こり、2人は正反対の方向に吹き飛ばす。

身体が地面に叩きつけられる。

遠くの方からうめき声が聞こえてくる。

大量の魔力を足に乗せて相手に叩き込む。放たれた魔力は相手のリンカーコアをズタズタにして魔導士としての人生を終わらせる技です。

うめき声が止まり、ゼストの死を告げる。

「勝てましたか」

戦場で桜の意識は途切れた。

傳く散るは狂気の花弁（前書き）

よろっと終わります。

傳く散るは狂気の花弁

焼けただれた右足を引きずりながら、戦場を歩く。どこもガジエツトの残骸や管理局員の死体で満ちている。

地獄だな此処は。

レイアーノは周りを見渡し、思う。その間も歩みを止める様な事はしない。死に溢れた空間で歩くのを止めれば、死に引きずり込まれる錯覚があるからだ。

デバイスを杖代わりにして歩き続ける。

不意に遠くの方に見覚えのある髪色を認識した。

「相討ちか？」

目の前には、機動六課の2人『ティアナ・ランスター』と『スバル・ナカジマ』数名の戦闘機人が倒れていた。戦闘機人に関して言えば、もう事切れている。ティアナ・ランスターはまだ呼吸をしているがスバル・ナカジマは駄目だな。

「ねえ、お兄さん」

上から急に人が降ってきた。ソイツは上手い具合にランスターの上

に着地した。ランスターは肺の中から空気を絞り出すような、声をあげた。

「管理局の人？」

歳は30前半位の栗色の髪をした女が話しかけてきた。大鎌型デバイスを肩に担いでいる。

「そうだが」

「やっぱり」

「ソイツ等殺ったの…オマエか？」

女に下敷きにされているランスターを眺めながら言う。…ランスター
「頑張れ。」

「勿論だよ」

はっきりしてんな。

「斬殺卿だな」

「そうさ、世間で大人気の斬殺卿32才です」

32才でこのノリだと！？恥じらいはないのか。

デバイスを構え、様子見にシューターを放つが、大鎌に切り裂かれる。

「せつかちさん」

大鎌を振り回しながら、斬殺卿が迫ってくる。

右足に力が入らないので、攻撃を受け流すことに全力を出す。

「あたしは管理局が嫌いだよ」

「知らんわ！！」

後ろに跳び、距離をとる。

「アイツ等はあたしの最愛の人を奪った！！何もしていないのに、ロストロギアの裏取引をする組織の幹部だってほざいて。幹部だと

無理矢理仕立てあげて、逮捕した」

大鎌から魔力刃が放たれる。最小限の動きで回避する。

「拷問されて殺されたんだよ!!」

「知るか!!」

薙刀型デバイスを突き出す。

「だから…死んでよ!!」

デバイスを力任せに振るわれた大鎌に弾き飛ばされる。

「さようなら!!」

右手に握った大鎌を振りおろそうとする。

「熱くなって、周りも見えないのか」

斬殺卿の後ろから腕が伸び、右の手首を掴む。

「ボロボロですね、レイアーノ」

斬殺卿の後ろからスードロが顔を出す。

「いつの間に!?!」

「結構前からです。貴女が語り始めた時位でしょう」

痛む足を引きずり、デバイスを拾いにいく。

戻ってくると、斬殺卿の胴体に穴が空いていた。

「やり過ぎだ」

ヨロヨロと頼りない足取りで月島 桜は歩く。

腕はなく、そこは赤い布で保護されている。

重心がズレ、何度も倒れそのたびに起き上がる。

空中には聖王のゆりかごが浮いている。

中ではまだ戦闘が続いているのかな。それとも負けたのかな。

歩く、転ぶ、立ち上がる、歩く、転ぶ、立ち上がる。

杖型デバイス『ラピエサージュ』は所々外装が欠けている。身につけるバリアジャケットもボロボロで血がベッタリとついており、元の面影がない。

うつ伏せに倒れる。

限界が近いのでしょうか？

暫くそのままでした。

複数の足音が聴こえてくる。

私を取り囲むように足音が聴こえ、話し声が聞こえてきた。

「戦技隊長月島 桜。貴女はいずれ来る聖王様の時代において、邪魔だと判断されました。よって処分します」

いずれ…く…る？聖王の時代なんてもう二度と来ません。

「聖王様の為に…！」

1人が大声で叫ぶと、周りも続いて叫びだした。

「聖王様の為に!!」

「聖王様の為に!!」

怖いですね、狂信者は。

狂信者達が近づいてくるが起き上がる気力もありません。

いきなりの轟音。周りから悲鳴が聞こえてくる。すると聞き覚えが有りすぎる声がきこえる。

「桜に手を出していいのはオレだけだ!!」

レイ、何恥ずかしいこと。

「桜は僕にメロメロなんです!!」

初めて聞きましたよスー!!

暫くすると、戦いの音が止んだ。身体を引っ張られる感覚がすると、レイとスーに抱き締められていた。

「桜、無事か」

「桜、大丈夫ですか」

無事でも大丈夫でもありません。右腕がちぎれて、凄く痛いです。

2人に支えられながら立ち上がる。

2人の体温を暖かいと思う私がいま。

しかし、敵は待つてはくれない。様々な場所からガジェットが現れ、
囲まれる。

「まだ居んのかよ」

うんざりしながらもレイアーノはデバイスを構える。

「疲れましたね」

心底疲れた顔で周りを警戒する。

「頑張りましょう、レイ、スー」

片手でデバイスを持ち、2人に微笑む。

月島 桜の第二の人生（前書き）

短いし、駄文だが終わった。最後のシメはむずいです。

月島 桜の第二の人生

白、白、白、真っ白。

ふわふわふわふわ。

身体が自由が利かない。

…全治7週間。病院のベッドの上です。何故かふわふわします。

何故か私以外の気配がします。

何故か男の声があります。

何故かレイアーノとスードロの声がします。

「失礼します」

扉を開けて、オーリス姉さんとレジアス中將が入ってきた。

「こんばんは、姉さん、レジアス中將」

「こんばんは、桜。あとレジアス中將じゃなくて、父さんと呼んであげなさい」

レジアス中将改めて父さんは床に崩れ落ちている。

悪いことしたかな？

「父さん、聖王教会の件はどうになりました」

とりあえずオーリス姉さんのアドバイスに従って尋ねるとレジアス父さんは瞬時に立ち直り、私のベッドの隣に椅子を置き、座った。

「今回暴走した過激派の信者について、聖王教会の方は独断で行動したと言っている。自分達の指示ではないので、関係ないとな」

レジアス中将が呆れている。

「それでは市民が納得しないですね」

スードロがベッドから這い出て、此方に歩いてきた。レイアーノも片足で跳びはねながらやってきた。

この病室はおかしい。私とレイアーノ、スードロの3人が入院しています。男女が同じ部屋なんです。

レジアス中将曰く、この2人には他の奴等を追っ払う役目を担ってもらうとのこと。貴方のせいですかレジアス中将。

2人は私のベッドの左右にあるスペースに腰掛ける。その2人を睨

み付けるレジアス中将。

「だな。暴走を止められなかったんだ。管理責任能力を問われるな」

今、聖王教会は非常に危うい立場にある。JS事件で聖王教会の一部が暴走。ゆりかご内にいた聖王ヴィヴィオを確保して、聖王教会の旗頭としようとしたらしいです。次元世界を聖王によって統治すると。唯一生け捕りにした狂信者をシバいて聞き出したようです。その事を持ってレジアス中将が聖王教会を攻撃。マスメディアを味方につけ、様々な危険性を突きつけていったそうです。

危ういのは聖王教会だけではありません。管理局地上本部は戦力の多くを今回の事件で失ってしまった。平和を維持するための戦力がいない為に本局から貸し出しをしなければなくなり、貸しを作っている。戦技隊にも要請がきたが、全力で拒否しました。

少数精鋭を謳っていた機動六課は隊舎も高ランク魔導士も失った最悪の部隊でした。

機動六課襲撃でシャマルとザフィーラ。

聖王教会の狂信者に鬼道 暁が殺された。

斬殺卿にスバル・ナカジマが殺され、ティアナ・ランスターは右の視力を失い、射撃型魔導士としては死んでしまった。

ゆりかご内ではヴィータが死亡。

ギンガ・ナカジマはストライク分隊に処理された。

生き残った高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、夜神はやては後ろ指を指されるようになってしまいました。

私は右腕を肩から失い、切り傷や打撲がある。

レイアーノは右足が焼けただけ、脇腹を刺された。

スードロは全身打撲に両足の骨折。

全員が重症で長期休暇？をとっています。その間、各分隊は副隊長が運営しています。

二度目の人生。

色々ありました。

前世でも味わったことの無い事件にも巻き込まれました。

レイアーノとスードロは私を狙い、今も戦い続けています。

ティアナ・ランスターが泣きながら戦技隊に入れて欲しいと言っ
きます。

レジアス中将は娘はやらんと頑なに言います。

私は生きる理由があります。必要としてくれる人がいます。だから
私は元気にやっています。

嫌いだった病院のベッドの上で微笑みながら、みんなのやり取りを
見つめる。

あとがき？

月島 桜の第二の人生を最後まで読んでいただきありがとうございます。初めて書いた？小説なので皆様の中には不快になる表現があったかもしれませんが。それでも忍耐強く読んでいただけたら幸いです。

さて、この『月島 桜の第二の人生』は本来もう少し長くなる予定でした。ですが私の実力では最後まで書ききれないだろうと、幾つかの場面や設定を省きました。その事を簡単に記したいと思いますので、時間に余裕のある方はどうかお付き合いください。あと初期設定的なものも書きます。

初期設定

月島 桜

幼いころ事故で片腕をなくした。
これは最後に片腕を失うに変更。

なのは達と同一年。

仮面ライダーブレイドのキングフォームみたいに、ジュエルシールド13個を同化させる強化フォーム『真ストライクフォーム』があった。

過剰戦力になるのでアウト。

必殺技がアカシックバスターのパクリ。

デバイス『ラピエサージュ』はインテリジェンスデバイスで何回も改修されて、杖、斬艦刀、トンファー、ヌンチャク、槍、双剣に変化した。

レイアーノ・レクリエ

初期の名前はフィルオール・テストロツサでキャラが全くちがう。

アリシアのクローンで性別が違いため失敗作扱い。

必要最低限の知識しかない。

これがレイアーノの口の悪さに変わる。

デバイスマスターではない。

スードロ・ハグルト

初期は夜凧やなぎ 御風みかぜという名前で桜達より二才年上。

デバイスはパイルバンカーで、チェーンソー、大砲型に変化する。

鬼道 暁

初期設定では存在しなかった突貫工事みたいなキャラ。

排除された話

桜vsフェイト

桜を機動六課に誘うために闘う。フェイトが勝ったら桜は機動六課行き。

戦技隊長陣vsカウデン・ロー（未登場）

戦技隊最初の大事件で不死身になるロストロギア『エターナル・ヘルツ』を使うテロリストとの戦い。

初期設定では此処でティアナと出会い、後に機動六課に入らず戦技隊に入るきっかけになる。

本編、スペリオル事件に変更。

ストライク分隊vs管理局地上部隊+はやて

地上本部の幹部が戦技隊を潰すために、濡れ衣を着せて逮捕しようとした話。

レイアーノ vs スードロ

桜に告白するのはどちらか決める闘い。

純粹にボツ。

レイアーノ vs トーレ

ヴィヴィオ初登場の戦闘でアサルト分隊長のレイアーノを倒し、士気を下げさせるためにトーレが戦いを挑む。

スードロ vs ヴィータ

JS事件中に過去の恨みを晴らすため、ゆりかご内で戦闘。

スードロ vs なのは

上記と同じ

桜 vs トーレ

JS事件中、トーレがガジェットを率いて戦闘。相討ちに近い形で桜の勝利。

時間軸的にはレイアーノ vs チンク スードロ vs セインと同じ。

代わりにゼストとの戦闘は無し。

レイアーノ + スードロ vs ゼスト

レジアスの場所まできたゼストと手負いの状態で戦闘。

戦技隊長陣 vs 鬼道 暁

JS事件中、戦闘機人にフラグを立てようとした暁と対立。本来、暁は此処で死ぬはずだった。

主役陣と戦わせるのはもったいないのでボツ。

さらに設定変更

ガードフォース隊長シュタルク・シルトは名無しでの登場だった。性格は固い感じの中年男性ではなく、軽い感じの若者だった。

ちなみにシュタルク・シルトは合っていればドイツ語で強い盾と言う意味になる。

ホルスは隊長が登場する予定でドゥー工と戦闘するはずだったが、
出番の全てをガードフォースに変更された。

以上、設定の変更でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9173r/>

月島 桜の第二の人生

2011年4月27日10時21分発行